

生活教育では、考えること（理性）を重視しつつも、人格や生活全体の中で、とらえようとしてきている。一方、感性や情動、情緒などの研究を深めるとき、それを一面的に強調しないで、理性も含んで子どもを丸ごととらえる視点を忘れないようにしたい。「保育所保育指針」にいう養護（子どもの生命の保持及び情緒の安定）は、「学び」を重視するならなおさら幼小中高の学校教育にとってこそ必要だ。

フェスターは、学習を理性だけでとらえず、ストレスやホルモン系の影響のネットワークの中で考え、モデルを提案した（文献①198ページの図）。「勉強できない」子どもには、認知的な指導だけでは不十分なほかの情緒不安定などの理由がある。

ワロンも、脳だけでなく、ほかの臓器、筋肉、骨との関係を重視し、五感を通じた外の世界との身体の関わりを、中枢・内臓系・骨格筋系の3つでとら



えた（文献②123、126、129ページの図表）。そこから、情動や表象がどう発生してくるかを明らかにした。生後4か月から7か月ごろみられる、うつぶせで手足をあげる「飛行機」の姿勢（そのトーンスル緊張）は、表象（そして理性）の発生の前提になっている（138ページ）。

NHKスペシャル「人体」では、最新の医療知見として、生命は「臓器同士の会話」で支えられていることを紹介している（イメージ図は文献③中表紙）。それぞれの臓器が、どんな「メッセージ物質」でやりとりしているかの研究が進んでいる。

（研究部・加藤聡一）

参考文献

- ①F・フェスター（田多井吉之介訳）『考える・学ぶ・記憶するそのとき脳では何が起こっているか』（ブルーバックス）講談社、1976年（原著1975年）。
- ②加藤義信『アンリ・ワロン その生涯と発達思想 21世紀のいま「発達のランドセオリー」を再考する』福村出版、2015年。特に115～143ページ。
- ③NHKスペシャル「人体」取材班『NHKスペシャル「人体」神祕の巨大ネットワーク①』東京書籍、2018年。